一夜限りのつもりが、
腹黒御曹司と予想外の
ゼロ日溺愛婚となりました

目次

一夜限りのつもりが、
腹黒御曹司と予想外の
ゼロ日溺愛婚となりました
番外編　仮面舞踏会再び

一夜限りのつもりが、
腹黒御曹司と予想外の
ゼロ日溺愛婚となりました

プロローグ

思いがけず参加した仮面舞踏会で、私は魅力的な紳士に出会った。
その人は、印象的な香りと低音ボイスで、私の心を深くまで捕らえた。
仮面を外したその顔は、判断するのも難しいような真っ暗な部屋では見ることがかなわない。
無理に彼の顔を見たところでどうしようと言うのか。
(明日には忘れなくちゃいけない人なのに)
刹那の関係に虚しさを覚えかけたその時、彼はふと耳元でささやいた。
「ね、君は永遠に続く関係ってあると思う?」
「永遠……ですか」
「俺は正直、そんな夢物語あるわけないと思ってる」
少し冷めたような彼の言葉を聞いて、私はふと両親を思い起こした。
「私は、あると思いますよ」
「へえ?」
「永遠に忘れたくないほど、人を愛することってあると思います」

(両親は、私の中で生きている。同じ時間軸にはいないけど……ずっと一緒って気がするから)
暗闇で男性が少しだけ笑ったように感じた。
「くだらない」
冷たく言い放たれる言葉とは裏腹に、落ちてきた頬へのキスは私の心を溶かした。
(優しいキス……あたたかい)
頬から唇へのキスに移ると、刺激はさらに甘やかになる。
「ん……」
キスされるたびに羞恥が薄れ、心の開放が起きていく。
顔がわからないのは不安ではあったけれど、そのおかげで心の壁を取り払って話すことができた。
(肌を合わせるって、こんなに心地いいものだったんだ)
彼との行為は驚くほど心地よくて、私は幾度求められても安心して身をゆだねた。
出会いがこんな形でも、後悔はしない。
「君が俺の永遠なら……」
深いキスの合間にささやかれた言葉は心に届かず、耳を掠めただけだった——

＊

ここは都内で最も高級なホテルのパーティー会場。

彼と出会ったのは、姉が主催するビジネスパーティーだった。本来私はお呼びではない催しだったけど、人数合わせのためということで渋々参加していた。
姉は弁護士の夫とともに海外展開の事業を起こしており、私とはまったく違う世界で生活している。
室内はどうやって装飾したのか、大小様々なベネチアングラスでできた調度品が置かれており、会場に入るなり独特の高貴なオーラが感じられた。
ダンスフロアを取り囲むように、ビュッフェ形式で料理が配置されている。
間接照明しかない薄暗い奥の席には、華やかな人たちがシャンパングラスを手に軽やかに笑い合っていた。
（仮面舞踏会ってすごい大人の空気なんだなぁ）
ドレスコードにあった仮面舞踏会というキーワードに沿うように、皆、ヨーロッパの貴族風な装いをしている。
ロココ調の豪華なドレスに包まれる女性を、スタイリッシュなスーツを着た男性が自然にエスコートしている。
（メルヘンの世界に紛れ込んだみたい……）
ぼうっとなった意識を現実に戻すために、豪華な料理を皿に盛って人の少ない席を選んで座った。
「ん、美味しい」
一流シェフを雇って作らせたと聞いていたから、今夜のお料理に私は最大の期待を寄せていた。

そして、それを裏切らない味に大満足する。
（もうこれだけで今日は来てよかった）
デザートまでしっかり堪能した私は、もう帰ろうかと思い始めていた。
着慣れないマーメイドラインのドレスがきつくて、料理がこれ以上は入らなかったというのもある。
（希子ネエのだから胸元が開くんだよね……）
急きょ姉に借りたフィットしきらないボルドー色のドレスは、胸元が開いていて心もとない。露出が気になって、ケープを深く羽織りコソコソとケーキを頬張っていた。
その時――
「君、ずっとここにいるね」
突然見知らぬ男性が私の隣に座った。
「もっと美味しいものがあるところに連れてってあげるよ」
フルフェイスの不気味な仮面をつけたその人は、無遠慮に距離を詰めてくる。
「結構です」
「どうして。ほら、行こう」
「ちょっ……」
彼は私の手から食べ終えた皿を取り上げて、ウェイターに渡してしまった。
（この人、押しが強い）

「ずっと目を奪われてたんだ。綺麗な髪してるな……って」
髪の毛先を軽くなでられ、背中にざわっと嫌悪感が走る。
（やだっ）
身を引いた途端、グラスが傾いてシャンパンがドレスに滴った。
「あー、綺麗なドレスを汚してしまったね。着替えないと」
わざとらしく肩をすくめ、私の肩を強引に抱き寄せる。
「どうせなら、俺の家に来る？」
ささやかれた瞬間、ざわっと嫌悪感が走って体が硬直した。触れられた感覚も、声も、匂いも、すべてに抵抗感が走る。
「離して……ください」
「抵抗が弱い。かわいいね」
私の拒絶を、本気だと捉えていないみたいだ。
（逃げたい。おネエ、どこにいるの）
「彼女が嫌がってる。手を離したほうがいい」
（え？）
低音のよく響く声が、頭上から降ってきて視線を上げる。
声の主は、ラメの入ったダークシルバーの仮面をつけていた。
仮面の奥に見える二つの瞳が、美しくも鋭く光っていて、静かな怒りがこもっているようだった。

その殺気にゾクリとなる。
「誰だよ？」
「〝ルイ〟」
「ふざけてんのか？」
「今回のパーティーは匿名での参加が規則になってるはずだ」
「匿名性なんてお遊びのルールだろ。イタリアの正式なパーティーじゃあるまいし」
「メガバンク頭取の息子さんにしては、ルールに甘いんですね」
（とうどり？）
私のほうが驚いてしまう。一生接点のない人がいるとは予想していたけど、本当にそうらしい。
「そこまでわかってるなら、口を出すなんて馬鹿な真似するなよ」
「身分を笠に着て、女性に乱暴するのは許されることじゃない。すぐにその女性から手を離せ」
ルイと名乗った男性はまったく手を引く様子はなく、私から男性を引き離した。
立ち上がった男性は明らかな不機嫌オーラを出して彼をにらんだ。
「くそっ、誰だかわかったらタダじゃおかないからな」
「ご自由に」
相手の脅しには一切怯まず、ルイさんは私の手を握ると、そのままパーティー会場から抜け出した。
大きな手に引かれて、私は言葉にならない安堵感の中でお礼を伝えた。
「あの……ルイ、さん。助けてくださってありがとうございました！」

（私ひとりでは、断りきれなかったかもしれない）
「お礼を言われるほどじゃないよ。じゃ……」
「あのっ」
そのまま去ろうとするルイさんを、思わず私は呼び止めた。
彼は振り返って私をじっと見る。その瞳には、もう殺気はなかった。
「何？」
「その……」
（私、なんで呼び止めたんだろう）
ルイさんはふっと笑って、口ごもる私の前に立った。
ブラックのビロードで仕立てた貴族風なジャケットと、ギャザーの入ったオフホワイトのシャツが視界に入る。
そこから漂ってくる高貴な空気と芳しい香りに、ふっとめまいを覚えた。
「具合でも悪い？」
「いえ」
「でも少し肩が震えてるよ」
言われてみて、確かに自分が小刻みに震えているのに気づいた。
（怖かったからかな……安心したからかな……）
混乱する私を放っておけなかったのか、ルイさんは一旦私に座るよう促した。

「落ち着くまで、一緒にいてあげるよ」
頷いておとなしく座った私に、彼はホットワインを持ってきてくれた。
「アルコールは飛んでる。これ以上酔うことはないから安心して」
「ありがとうございます」
（さっきの人と全然違う……この人の声も仕草も、すごく安心する）
慣れない場所のせいなのか、思いがけず異性に惹かれる自分がいた。
助けられたからといって、すぐに好意を持つなんて単純すぎる気もするけれど……ルイさんにはそれくらいの魅力があった。
（こういう場所だから、二割増しイケメンに見えるとか？　いやいや、おちつけ私！）
「ふう……あっ」
下を向くと、ドレスのレース部分にこぼれたシャンパンが染みになり、薄く輪を描いて浮き上がっているのが見えた。
「ああ、染みになってる」
私の焦る様子に気づいたルイさんが軽くレースに触れた。
「時間が経つと取りづらくなる。染み抜きの液剤を頼もうか」
「あ……いえ。そこまでしていただくのは……」
（慣れない場所に来るから、こういうことになるよね）
ルイさんともう少し話していたいけど、これ以上迷惑はかけられない。

「私、帰ります」
「え、これからダンスタイムなのに？」
「はい。親切にしていただいて、ありがとうございました」
ワイングラスを置いて立ち上がると、ヒールでドレスの裾を踏んでしまった。
「っ――」
「危ないっ」
ルイさんはとっさに両腕で私を抱きかかえ、はあ、と息を吐いた。
「大丈夫？」
「は、はい。すみませんっ」
（もうっ、私はどこまで迷惑かける気なの）
慌てて離れようとするけれど、なぜか彼は腕の力を強める。
抱きしめられたような格好になった私は、彼の腕の中で一瞬息が止まった。
「あ、あの……」
戸惑う私の耳元で、ルイさんは魅惑的な低音ボイスでささやいた。
「君さえよければ今夜、一緒に過ごさない？」
（えっ）
即答でお断りしていい申し出だったのに、なぜかその押し付けがましくない誘い方に心が揺れた。
（でも、一緒に過ごすってことは……そういう意味だよね）

求められるものは想像できたけれど、決意できるほどの勇気はない。
それを察したのか、ルイさんは優しく言葉を付け足した。
「君が触れてほしくないというなら、触れない」
ルイさんの落ち着いた声は、本当にそれを守ってくれるように感じる。
普段の私なら、このラインを越えるのはほぼ不可能だ。
異性への警戒心はそこそこ強いほうなのだ。
（でも、なんでだろう……ルイさんの声を聞いているとぼーっとしてくる）
冷静でないようにも思うけれど、この申し出を断ることもできない。さっきのフルフェイスの男性にフリーズしたのと違い、ルイさんともっといたいと望んでいる自分がいた。
（このまま別れるのはさみしい）
「その……一緒にお酒を飲む程度でしたら」
私の答えに、ルイさんは嬉しそうに頷き、軽く抱きしめて私を見下ろした。
「それでいい。じゃ……二人で飲み直そうか」

手を引かれて入ったのは、空の上に住んでいるような感覚になるほど、高い場所にある部屋だった。
「こんな高いところ、初めて来た……」
「誰にも邪魔されない場所って感じでいいでしょ」
ルイさんは小さく笑いながら、二つのグラスに赤ワインを注ぎ入れた。たちのぼる香りは、熟成

されたものだとわかる。
「まずは乾杯しよう」
テーブルを挟んでグラスを傾けると、お互いに一口ずつワインを飲む。
（美味しい）
思った以上の味に感動して、私はそのまま一気に半分くらい飲んでしまった。
「はは。いい飲みっぷりだね」
（わ、恥ずかしい）
グラスから口を離すと、慌てて背筋を伸ばす。
「改めて……助けてくださって、本当にありがとうございました」
「どういたしまして」
余裕のある笑みを見せると、ルイさんは広々としたソファに腰掛けた。そこからは街の灯りが一望できて、明らかな特等席だった。
「お隣、いいですか？」
「もちろん」
少し間を空けて隣に座ると、体全体がふんわりソファに包まれた。
（うわあ、こんなに心地いいソファがこの世にあったなんて）
すっかり身を預けると、残っていた警戒心のかけらが解けていく。
知らない男性と二人きりだというのに、どうしてこんなにリラックスしてしまっているんだろう。

ルイさんはそんな私に構わず外を見つめながら呟いた。
「こうしていると、ずっと前から君と一緒だったように感じる」
（口説き文句？）
でもルイさんの真剣な瞳はからかっているふうでもなく、胸が甘い予感にざわめく。
「どうしてそう思われるんですか？」
「安心する。いてくれるだけで嬉しいような……君にはそういう感覚ない？」
こちらに視線を向け、探るように見つめてくる。表情はわからないけれど、薄明かりの中で瞳は黒真珠のように光っていた。
「そんなふうに言ってもらうの、初めてです。いてくれるだけで嬉しいだなんて」
「そうなの？　ずいぶん謙虚だね」
「謙虚だなんて……」
吸い込まれそうな深い瞳の色につられ、私は思わず心の内を語っていた。
「私……普段から少し罪悪感があって。誰かの役に立ってないと落ち着かないんです」
それには少し理由があって。
私は両親を事故で亡くしている。その時、同じ車に乗っていた私は、二人に守られて助かった。まるで二人から「お前は生きなさい」と言われたみたいだった。
それは感謝しているけれど……そのことが、なぜか重くなることがある。兄姉にはたくさん気にかけてもらったから家族に迷惑な存在になっちゃいけない。兄と姉の足を引っ張っちゃいけないと

思ってここまできた。
「誰にも迷惑をかけないで生きていたいんです。でも合格点がどこかわからなくて……」
（私、初めて会った人に何を言ってるんだろう）
一人になるとふと浮かぶその深い悩みを、なぜか初対面のルイさんに打ち明けていた。するとルイさんが共感も否定もしない様子で言った。
「罪悪感があろうとなかろうと、生きていれば必ず誰かに迷惑はかけるんだよ。どんな思いがあったって、どうにかして生きていくしかない」
まるで自分にも言い聞かせるように言うと、こちらを見た。
「そんなに重い感情ばかり抱えて、疲れない？」
「っ」
付け加えられた鋭い言葉にハッとなり、私は彼を見つめ返した。
真剣に答えてくれているのは、その視線の強さからもわかる。でも、すぐにその言葉を受け入れられない自分がいた。
「ごめん。言いすぎた」
動揺して私が口をつぐんだのを見て、ルイさんは頬をそっと引き上げた。指先はひんやりとして、お酒で熱くなった頬に心地いいと感じた。
「君はそのままでいい、そう言いたかった」
（あ……）

甘いささやき声とともに、整った唇が近づく。
「ん……」
ふわっと上品な香水が香ったかと思うと同時に、唇が重なる。温かくて柔らかくて、体の芯に火がともるような……優しいのにどこか熱いキス。
幾度か重なったあと、惜しむように離れたキスにぼんやりしていると、彼は吐息のかかる距離でささやいた。
「なんで受け入れたの」
「……わからない、です」
（どうしてかわからないけど。もっとって思う）
「逃げないなら続けるよ」
今度はすくい上げるように深いキスが落ちてくる。
「ふ……っ、は……」
息をつくタイミングも与えないくらい、彼のキスは幾度も角度を変えて重ねられる。
（苦しいのに、心地いい）
こんな感覚になったのは初めてで、私も自分の欲求に戸惑った。
お互いに夢中で唇を重ねあう中、どんどん呼吸が上がっていくのがわかる。余裕があったように見えていたルイさんも、苦しげに息を吐いて私から離れた。
「ここじゃだめだ」

「えっ」
ルイさんはソファから立ち上がると、私を足元から抱き上げた。
ふわっと体が浮いて、思わず彼の首にしがみついた。
「っ、どこに？」
「隣の部屋だよ」
頬にちゅっとキスをすると、彼は私を抱えたまま奥のベッドルームまで歩いた。

その部屋は、淡い間接照明が一つあるだけで、ほぼ真っ暗だった。
「あ、あの……」
（こわい）
私は思わずルイさんの腕の中で体をばたつかせた。でも彼のたくましい腕はびくともしない。
「ちょっとじっとして」
私を抱えたままベッドの前まで歩き、シーツの上にそっと体を横たえた。
（このままだと……）
「あの、私……これ以上は」
「俺はもっと触れたいけど」
（あ……）
仮面をそっと外され、彼は目元を優しくなでた。

「怖い思いはさせない。誓うよ」
「でも、本当に私……」
経験も浅いし、この展開でいいのか自信がない。でも、心も体も嫌がってないというのはわかる。
（求めて……いいのかな）
「こうすれば恥ずかしくないだろ？」
ルイさんもつけていたダークシルバーのマスクを外して私を見た。けれど、暗すぎて表情も顔のつくりもほとんどわからない。
（瞳が美しいのはわかるけど）
「まだ迷う？」
「それは……」
（戸惑ってはいるけど、迷う……とは違う気がする）
「OKなら頷いて」
私は少し考えたあと、ゆっくり頷いた。
すると頬に触れていた手が胸元に下り、鎖骨（さこつ）ラインをなぞった。
（あ……）
指先がたどる場所がすべて熱くなっていき、声を我慢するので精一杯だ。でもドレスに手がかかった瞬間、私は咄嗟（とっさ）に彼の手を握って止めた。
「……」

彼は、私が止めた手を一旦見下ろしてから私に視線を戻した。
「何？」
「私がどんな顔か、わからなくていいんですか？」
「俺は構わないよ。君は？」
「ルイさんがいいなら……構わないです」
私の答えにルイさんはくすっと笑い、ベッドに身を乗り出した。
仰向けになっている私の上に、彼が四つ這いで覆い被さる。暗闇で私を見下ろし、彼はささやくように言った。
「一夜だけ君が欲しい。許してくれる？」
低音の痺れるような声が私の冷静さを奪う。
いけないようにも思うのに、この場を去ることなんかできないとも思う。
（この人に全部ゆだねたい……一夜だけとか、ずるい人だとも思うのに）
そう思うのに、私は引き寄せられるように身を起こして彼の唇に触れていた。
すると彼はくっと喉を鳴らした。
「さっきから、どうして笑うんです」
「想像通り……かわいい人だなと思って」
（さっき会ったばかりなのに？）
わずかに浮かんだ疑問を遮るように彼はキスを押し返し、そのままベッドの上で抱きしめられる。

「ん……っ」
シャツの上からもわかる引き締まった体が私の体を包んでいた。
（熱い……熱が込み上げてくる）
一夜だけという言葉に胸が痛んではいたけれど、求めたのは自分からだ……ともわかっていた。
否定するつもりはない。
（この人に触れられたい）
自ら彼の胸に頬をすり寄せると、印象深いムスクの香りが鼻腔をくすぐる。
彼は私の背中に手を回してドレスのチャックを下ろした。開いた背中に空気が入り込み、いきなり裸になった気持ちになる。
「っ、待って！」
「着たままじゃ触れられない」
ルイさんは痺れを切らしたように身につけていたものを脱ぎ捨てた。
燃えるように熱い肌が触れ、思いがけず溶けそうになる。
（何？　この安心感。あり得ないほどドキドキしてるのに……心から安心してる）
不思議な感覚のまますべてをあらわにした私たちは、もみくちゃになりながらキスをしたり抱きしめあったりして温もりを確かめあった。
「は……ぁ」
（気持ちいい……こんな感覚初めて）

夢中でキスをしていると、ルイさんの大きな手が私の胸を包む。それを優しく揉みしだかれ、恥ずかしいのに淫らに高まっていくのがわかる。
「かわいい胸だな」
「小さい、ですよね」
「いや、整っていて綺麗だよ」
恥ずかしさに隠そうとした手をつかんでベッドに押し付けると、唇を寄せる。
（あ……）
先端をやんわり口に含まれ、体温より高い熱で弄ばれた。
「花の蕾みたいだ」
「やぁ！」
恥ずかしがる私を見て楽しんでいるのか、ルイさんの愛撫は続いた。
胸の刺激が下半身に伝わり、秘部にじんわり広がっていく。
普段はまったく何も感じない部分が、どんどん熱を帯びていきショーツが濡れるのがわかった。
ルイさんはそこに指を伸ばし、ショーツの上から敏感な場所をなぞる。
「濡れてる」
「言わないで！」
「そう？　俺の声好きそうだけど」
どんな言葉もルイさんが耳元でささやくだけで私の体はいくらでも反応していく。

（声が好みなのって罪深い……ずっと聴いていたいって思っちゃう）
「ここも……」
「やっ」
いつの間にかショーツは剥ぎ取られ、秘部の中に彼の指が埋もれていた。
（こんな姿……っ）
「平気？」
恥ずかしくて泣きそうになりながらも頷く。
窮屈な感覚はあっても、痛みはない。甘い刺激が腰から下の力を奪った。
「ひぁっ」
深い場所で動かされ、腰が跳ねる。知らない自分の淫らな場所を、ルイさんは簡単に探り当てていた。
「や……ま、って」
慌てて足を閉じようとするけれど、それは許されなかった。
ルイさんは抵抗を受け入れながらもゆっくり押し広げていく。
「素直に感じて」
「あぁっ！」
（そんな、恥ずかしいっ）
唇でそこを吸い上げられ、思わず悲鳴をあげそうなほどの快感が走る。

猛烈に恥ずかしいはずなのに、まったく勢いを止めないルイさんのセクシュアルな空気に冷静さがどんどん薄れていった。
「あ……あぁ……」
舌先で小刻みに刺激されるのも極上に気持ちよく、思わず彼の髪をギュッとつかんでしまった。
「おかしくなっちゃう」
「いいね」
舌で敏感な部分を弄びながら、彼の長い指が出たり入ったりを繰り返す。やがて感覚が麻痺し、体の奥からあり得ないほどの快感が押し寄せた。
「何か……きちゃう」
（ぁ……）
はっと火が飛び散るような感覚と一緒に、一瞬頭の中が真っ白になる。
私はルイさんの背中に爪を立て、その押しあがった快感が去るまでしがみついていた。
（波にさらわれた……）
痺れた頭に軽く痙攣する体が自分だと思えず、呆然とする。
「少し待って」
息が乱れる私の額に軽くキスをして、ルイさんはゆっくり離れた。
そして一旦ベッドを降りると、自分のカバンの奥から何かを取り出した。
「それって……」

「命を授かるタイミングじゃないしね」
（あ、避妊ってこと？）
それを意識してくれているのが嬉しい。
女性はこんな時、相手がその守る意思を持っていることを先に確認する手段がほとんどない。
（当たり前のことなんだけど、やっぱり嬉しい）
戻ってきたルイさんは、私の手を取って薄い膜で覆われた自身に触れさせた。
（ちゃんとつけてくれてる）
安心した私は、こわばっていた体の力をふっと抜いた。
「いくよ」
「あ、待って、私……」
（ここから先、どんな感覚だったかほとんどわからない）
戸惑う私をいなすよう脚をさすり、緊張を解いてくれる。
「怖かったら止めるから」
落ち着いたのを見計らって、彼は私の片足を軽く持ち上げた。
「や……」
（恥ずかしい）
「見えてない、大丈夫だよ」
「……はい」

体をゆっくりこちらに傾けながら、彼が侵入してくる。指を受け入れていたそこが、かなりのきつさを感じた。
（……っ）
ビクッとしたタイミングでルイさんは動きを止めて私の様子を見る。
「どう、まだ大丈夫？」
「ん……大丈夫です」
（甘い痛みってあるんだな）
やめてほしいような苦痛の痛みではなく、そこを通り抜けたい欲求が強まる。
「少しずつね」
何度か先端を出し入れしているうちに、私の体も彼のものを受け入れる準備ができてきたようだった。
徐々に快感に変わってゆき、奥のほうに今まで感じたことのない大きな刺激を感じた。
「あぁっ、き……気持ちいい」
「君の中も気持ちいいよ」
遠慮がちに動いていたルイさんが、体を乗り出してさらに奥に入るよう体勢を変えて入ってくる。これ以上ないほどの快感と喜びの渦の中で、私は必死でルイさんにしがみついた。
「んぁん！」
子宮付近まで届く場所を貫かれ、私の最奥まで彼は熱を届けてきた。

（さっきと違う波……また、きちゃう）
どんどん上に突き上げられる感覚と同時に、波のように押し寄せる快感。
指でイくのとは全然違う……体全体が痺れるような感覚だ。
「イ……っちゃ……う」
「く……っ」
キュウッと下腹が収縮すると同時に、ルイさんも押し殺すような声をこぼす。
と同時に私を折れるほど抱きしめ、体を震わせた。
「ルイさん……っ」
思わず彼の名を呼び、私も精一杯彼の背中に腕を回した。
（気持ちいい……あり得ない……）
しばらくつながったまま私たちは汗ばむ肌を寄せあっていた。
少しずつ引いていく興奮のあと、私は体験したことのない深い安堵（あんど）を覚えていた。
（この人はいったい……）
「ルイさん……本当に私たち……会うの初めて？」
思わず尋ねたけれど、彼は答えない。
答える代わりにキスを返され、あっという間にまた甘い感覚に引き込まれる。
「あ……っ」

素肌に触れる手の感触、頬や唇に落とされるキスの温もり。なぜかすべてが心地よくてまるっきり抵抗できない。
（どうして、この人なら大丈夫って思うんだろう）
私はほんの数時間前に出会った顔も知らない人と、深くつながりあっている。たまらなく愛おしいという気持ちが湧いている自分に戸惑った。
（どうして……）
動きを止めてルイさんが耳元でささやいた。
「集中してないね」
低音の、痺れるような、甘美な声。それはまるで獲物をつなぎとめるための呪術のような響きだ。
「だって。やっぱり……おかしいですよ」
「顔を知らない男とこうしてるのが？」
「はい」
「今さら」
そう言った声に笑いが混じっていて、私は思わずムキになる。
「どうして一夜なんです？　どうして……」
（名前も何もわからないままだなんて）
「知りたい？」
悪戯（いたずら）っぽく言うと、緩んでいた手に力が込められ体が折れそうなほど抱きしめられる。

身動きのとれない私の耳元で、彼は優しくも残酷な言葉を告げた。
「そのほうが燃えるからだよ。それに俺が何者なのかたどられても困るしね」
「……そうですか」
ズキリと胸が痛んだけれど、そういう約束なのも思い出した。
（それでいいと言ったのは私だ）
彼との行為にはすごく愛を感じたけれど。結局、一晩の気まぐれな関係ということだろう。
それを嫌というほど理解した私は、がっかりというよりはむしろ開き直った。
「ルイさんの言い分、よくわかりました」
（なら、もっとあなたを記憶に残したい）
私は彼の手を握り、もう一度さっきの甘美（かんび）さを求めた。
「さっきよりもっと刺激的なのを……」
「案外大胆なところあるね」
「こういうの嫌いですか？」
「いや、歓迎。俺も本気で応えないとね」
ルイさんは愉快そうに答えると、息もつけないようなキスをしながら私の手をベッドに縫（ぬ）い付ける。
一度去った情熱が、また二人の間で着火されたのを感じた。
「は……ぁ」

（やっぱり気持ちいい）
絡めとられた舌先が私の心を熱で溶かしていき、頭の中は真っ白だ。
（恥ずかしいのに、もっと……って思ってる）
もう猜疑心も後悔もなかった。むしろ正体のわからない胸の苦しさは、甘い切なさとも言えた。
こんなに相手を知りたいと思ってしまっているのだ。忘れたくても姿を見ればきっと追いたくなる。
（これでいいんだ）
この時の自分は普段のペルソナをすべて脱いだ。
平常時では想像もできないほどにあけすけで、正直で、自由だった。本当に自分なのかどうかも、判断ができないほどだった。
（あなたは忘れてほしいんだろうけど）
二度の交わりのあと、私たちはすっかり肌の馴染んだ体を寄せあう。安堵と心地よさの中で私は少しだけ涙ぐむ。
（忘れられないほどにあなたは刻み込まれてしまった）
「今夜のことは忘れない」
ルイさんがその言葉をどんな気持ちで言ったのかはわからない。でも、せめてそれは本心だったと思いたい。
（もう一度会ってしまったら、きっと離れられなくなる。それなら今夜限りにするのは……確かに

正解かもしれない）
〝また会いたい〟と思う本音を押しとどめ、私はルイさんのたくましい胸にギュッと頬を寄せた――

＊

翌朝、ホテルのベッドで目覚めた私の視界に、天井のシャンデリアが飛び込んできた。
（……ここ、どこ……）
シーツの感触が、いつもより滑らかだ。微かなカーテン越しの朝日が、頬に触れている。
（ああ、私。昨日希子ネエの開いたパーティーに参加したんだった）
二つ年上の姉である希子は、弁護士の夫とともにニューヨークでセレブリティな生活をしている。珍しく日本に戻ってきたと思ったら、付き合いのためと言って、有名人を集めたパーティーを開いた。ヨーロッパ貴族の真似事みたく、参加者は仮面をつけることがドレスコードになっているという、特殊なパーティーだった。
強引にその場に呼ばれた私は、慣れない空気にすっかり呑まれてしまった。
（で……強引な男性に声かけられて。そこを助けてくれた人と……）
「あ……れ？」
（まさか）

胸元にかかる白いリネン。触れた肩口は冷えている。
そこが熱を帯びていた瞬間がふと蘇り、そこから現実がじわじわと浮かび上がって来た。
「うわっ！　私、あの人とここで……っ」
（確か名乗っていた名前は〝ルイ〟）
反射的に起き上がって隣を見た。
明け方までそこにいたはずのルイさんの姿は、当然のように消えていた。
「……夢？」
そう思ってしまうほど、昨夜のことは現実とは思えなかった。でも、ベッドサイドにあるテーブルに、彼のつけていたダークシルバーの仮面があるのを見て夢じゃなかったと再認識する。
（やらかしてしまった……）
後悔はないけれど、やはり自分のしたことは軽くショックだった。ムードに流されたとはいえ、初対面の人に体を許してしまうなんて……
自分の普段のキャラを考えると、まったくあり得ない。
（お兄ちゃんに知られたら絶対怒られる！）
過保護なくらいの優しい兄は、私が幸せな結婚をすることを誰よりも望んでいる。だから姉の誘ったパーティーでこんなことがあったと知れたら、兄妹喧嘩に発展するに違いない。
（ただでさえお兄ちゃんと希子ネエは微妙な関係なのに）
昨夜のパーティーに参加したのも、二人が仲良くなるきっかけになればと思ったからなのだ。

（なのに、この体験は報告なんかできないよ）
「うまくいかない……」
兄にショックを与えることは望んでいないから、昨夜のことは当然内緒だ。でも、希子ネエにはそれとなくあの人が誰だったのか聞いてみようと思う。
自分でも信じられないけれど、昨夜のことを私は後悔していない。恋愛ごとに疎い自分にとってとても素敵な体験だった。
（心地よくて離れたくなかったっていうか……本当に相性のいい人だったなあ）
「これっきり……っていうのがすごくさみしい」
夜は確かな温もりを感じて嬉しかったはずのシーツは、人肌などなかったように冷えている。それだけで言いようのない虚しさでいっぱいになった。
「強引にでも名前くらい聞けばよかった」
（後悔しても仕方ないけど）
驚くほど心地よかった一晩の感覚が、私の胸を痛いほどに締め付けている。
「あんな素敵な人、もう二度と現れない気がする……」
嘆いている間にも時間は過ぎ去り、気づけば七時を回っていた。
「いけない、もう出ないと！」
慌ててベッドを降り、雑にシャワーを浴びて服を着替える。
慣れない香りにやっぱり違和感があって、もうこんな軽はずみなことはしないと自分に誓った。

（また、ルイさんに会ってしまったら、わからないけど……）
なんて、未練がましいことを思ってしまう。
体から始まる恋って、あるんだろうか。
わからないけれど、私の体にはまだ昨日抱きしめられた火照りが残っているのは確かだった。

＊

自分のアパートに戻って改めてシャワーを浴びた私は、鏡の中の自分を覗き見る。
見慣れたいつもの自分だ。派手なパーティーで、男性と一夜を過ごすようなキャラじゃない。
「春花、戻っておいで。あなたは、一夜の夢を見ただけなんだよ」
鏡の中の自分にそう言ってやると、熱に浮かされていた頭がスッと冷えて冷静な思考が戻ってきた。
（そうだ。私は会社員をしている二十八歳の普通の女性。東雲春花だ）
「……お腹が空いた」
現実に戻って安心した私は、自作の薬膳カレーと白米をレンジで温め、小さなお皿一杯分だけそれを食べた。するとまたさらに現実感が湧いた。
（よし、これなら会社でも普通に過ごせそう）
気合を入れ直した私は、いつも通り髪を後ろで束ねて外に出た。会社に向かう途中のコンビニでホットコーヒーを買い、目が冴えると同時に夢のような思い出は遠のいていく。
（仕方ないよ……覚えてたって辛いだけだもの）
切なくなる気持ちを呼吸で整え、エントランスに入る。入り口で飲み干したカップをダストボックスに捨て、身を引き締めた。
そしてロビーを通り抜けようとしたら――
「あれ？」
フラッパーゲート通過のために必要な社員証がない。いつもなら、バッグの一番わかりやすい場所に入れてあるのに。
「なくした？」
焦りを抑えながら記憶をたどっていく。アパートではカバンは開けていない。ということは、帰宅時にすでになかったということになる。
（まさか……ホテルに？）
バッグはホテルで一旦全部整理したのを覚えている。でも、そのあと何かの拍子に社員証が落ちたのかもしれない。
「ホテルに問い合わせないと……」
（でも、あったとしても今からじゃ始業に間に合わない）
どんどん中に入っていく同僚たちを見送りながら、私は踵を返して裏口へ回る。
（面倒だけど、守衛さんのところで仮の社員証を借りるしかない……）

社員証がないと、他の人にも迷惑をかけるからげんなりする。課長に事情を説明してサインもらわなきゃいけないし、パソコンを起動するために事務所へ許可を取りに行かないといけない。とてもショックだ。
「どちらの部署の方ですか？」
守衛さんは明らかに面倒そうな顔をしている。
「ええと、総務部総務課です。課長は蒲田さんで……」
「わかりました。ではこの紙に部署とお名前を書いてください。後ほど蒲田課長にサインをいただかなくてはなりませんので」
「はい。本当にすみません」
ぺこりと頭を下げ、部署と名前を書こうとすると……
「社員証ってこれ？」
目の前にシルバーのカードホルダーをぶら下げられた。
「っ、これです!!」
反射的に社員証を手に取ると、そこには確かに自分の顔写真が印刷されていた。
「よ、よかった……」
（ホテルに落としたかと思ったけど、違ったんだ）
心の底から安堵した私に、クスリと笑う声が聞こえた。
「あっ、ありがとうございました」

慌てて恩人の顔を見上げると、驚くほど整った顔をした男性が涼しい目で私を見下ろしていた。
（こんな綺麗な人、会社にいたかな）
「これなくしたら大変だろ」
「は、はい。本当に……なんとお礼を言ったらいいか。以後、気をつけます」
「当然だ」
ピシャリと言い切る言葉が、予想外に冷たい。見かけが綺麗なだけに、その声音は何倍も怖く感じた。
（私が悪いんだけど、なんか……偉そうな人。だいたい、これどこで拾ったんだろう？）
私が社員証を手に固まっていると、男性は守衛さんに向き直った。
「今回は社員証は見つかったわけだし、彼女、このまま通してやっていい？」
「ですが」
「書類も結局は俺のところにくるんだし」
（書類が、この人のところにいく？）
少しの疑問が湧いたけれど、目の前の男性につい見惚れてしまう。明らかに普通の人とはまとう空気が違うのだ。
仕立てのよさそうなスーツ、裾には磨かれた革靴、袖には存在感ある上品な腕時計が光っている。
（若く見えるけど、役職を持った人なのかな。あと……声が、気になる）
耳に残る低音ボイス。ルイさんもそういう声の持ち主だったけれど、この男性もすごく魅惑的な

声をしていた。
（すごく似てる声だけど……まさか、だよね）
「人の顔ジロジロ見ないでくれる」
切れ長の目をこちらに向けられ、心臓が飛び出しそうなほど驚く。
「すみません！　でも、なんだか……どこかでお会いしたことがある気がして」
「そりゃ……」
彼はクッと喉を鳴らし、意地悪な笑みを浮かべた。
「俺はこの会社の本部長だし、見たことくらいはあるんじゃない？」
「ほっ、本部長？」
本部長という役職に就いている人は、一人しかいない。
（ってことは……この人は……）
さっきまでの己（おのれ）の態度を振り返って、思わず冷や汗が出る。
「もしかして、蒼沼海翔（あおぬまかいと）さん……ですか？」
「自己紹介なんか、この会社では必要ないと思ったのにな」
蒼沼さんはため息まじりに肩をすくめ、目をくるりと回した。
海外ではこの仕草は相手を馬鹿にする時に使うと聞いたことがある。
（性格わるっ）
蒼沼海翔、三十二歳。私が勤める蒼沼物産（ぶっさん）の御曹司（おんぞうし）だ。私にとっては雲の上の人。

（まともに顔も見たことなかったけど。整った顔立ちの人だったんだなあ）
私が驚きで固まっていると、彼は書類にチラと目をやってから守衛さんを見る。
「とにかく、俺が責任持つから今回はこのまま通して？」
「ええまあ……蒼沼さんがそこまでおっしゃるのでしたら」
「ありがとう。もし後でどうしても提出が必要な書類があったら、俺に送って」
「承知しました」
規則に厳格な守衛さんも、この人には従順だ。
（それはそうか）
創業者である現会長の孫であり、今はフランスで本部を動かしている現社長の長男だ。社長が退陣されたら、三代目としてこの大会社のトップになる人。
（なんか……いたたまれなくなってきた。早くこの場から去りたい）
縮こまっている私を見て、彼は楽しげに目を細める。
「ほら、遅刻するよ」
「えっ、あ……」
先に歩き出す蒼沼さんの背中を見て、私も慌ててそれを追おうとして足を止める。
「ありがとうございました！」
守衛さんに頭を下げると、守衛さんは早く行きなと目で合図した。
もう一度お礼を言って蒼沼さんを追う。なんとか追いつくと、彼がすでに呼んでいたエレベーター

に一緒に乗り込んだ。
ドアが閉まると同時に訪れた沈黙に、心臓がバクバクしてくる。
（どうして蒼沼さんは私とエレベーターに乗ってるんだろう）
管理職が入るゲートはまた別の場所にあったはずなのに。
激しく打ち付ける心臓を押さえて息を吐くと、後ろからすっと腕が伸びてきた。
（っ、抱きしめられる？）
そんなことあるはずないのに、私は思わず肩をすくめた。
彼はそのまま、私の目の前にある、階数のボタンを押した。瞬間、嗅いだことのある香りがふわっと漂って、ふと甘い記憶が蘇りそうになる。
（この香り……）
「ボタン押さないと動かない」
「あ……すみません」
「いちいち謝らなくていい。総務課は十六階でよかったよね？」
「はい」
答えた瞬間、エレベーターはぐんっと上に昇っていく。沈黙が気まずくて、なんとなく増えていく階数表示を見つめる。
（気のせいかな……さっきの、ルイさんの香りだった）
ドアが閉じたエレベーター内にも、ウッディーなあの香りがほんの微かに漂っている。

（でもこれは蒼沼さんの香り、なんだよね）
ドキドキが強くなり、ついちらりと彼の顔をうかがい見る。近距離で見ても肌はツヤツヤで、思わず触れたくなるほどの綺麗さだ。
（ルイさんと蒼沼さんが同一人物なわけない。でも、だったら、どこで私の社員証を拾ったんだろう）
そんなことを考えていると、蒼沼さんが視線を下ろして私を見る。
「なんか言いたげだけど、何？」
「いえっ、そんなことないです」
（昨日、私と寝ませんでした？　なんて聞けるわけないし）
「そう」
蒼沼さんはそっけなく頷き、視線をモニターに移した。
（気まずい……）
数秒がやたら長く感じたけれど、エレベーターがようやく十六階に到着した。
（よかった）
開いたドアにホッとして廊下へ出ようとすると、蒼沼さんが不意に声をかけてきた。
「社員証、エントランス前のダストボックスに入ってた」
「え？」
驚いて振り返ると、彼は無表情のまま私を見つめている。
「もう捨てないでね」

「す、捨ててなんかいませんっ！」
ムキになって言い返す途中でエレベーターの扉は閉じ、彼を乗せて上がっていってしまった。
（今の絶対に嫌味だよね）
親切にしてもらったから感謝したいのに、どうも態度に納得がいかない。
「やっぱり性格悪いなあ……彼がルイさんなわけないよ」
はっきり否定してみると、彼との美しい一夜が守られてホッとした。
と同時に、疑問が湧く。
（なんでダストボックスに社員証が……？）
「あ……コーヒーカップ捨てた時……？」
でもカップを捨てた時はカバンを開けたりはしていない。
「どういうこと??」
謎は深まったけれど、これ以上悩むのは時間の無駄だ。
（アクシデントはあったけど、始業に間に合ってよか……）
腕時計を見ると、始業時間が数分後に迫っていた。
「やばっ！　朝のミーティングに遅れる！」
私はカバンを肩に掛け直し、慌ててフロアに入った。
「遅くなってすみませんっ」
すでに他のメンバーは着席していて、蒲田課長がチラと私を見てため息をつく。

「さっさと席につけ。朝のミーティング始めるぞ」
「はい！」
（あと一分遅かったら、ガッチリ怒られる空気だった！）
間に合ったことにほっとして席につく。
安心したら、さっき会った蒼沼さんの顔が頭にチラついた。
（考えてもしょうがないけど、なんか気になるんだよね）
普通に歩くだけで多くの人が振り返るようなオーラがあって、人気があるのも納得の容姿だった。
（性格が悪いのは置いておいて……まあ、綺麗な人ではあったよね）
スラリとしたバランスのいい体に、お人形のように整った顔がちょんとのっている。
ルッキズムへの反抗心を抱く人ですら、彼の姿を見れば理屈を超えて見惚れるだろう。
（ルイさんと同じ香水なんかつけてるから……つい、意識してしまう）
その時、妄想を止めるような甲高（かんだか）い声が耳に届いた。
「ちょーっと、東雲さん！　昨日お泊まりだった？」
「!?」
朝礼が終わるなり、先輩の菊間（きくま）さんが興味津々な顔で近寄ってくる。
（一旦アパートに戻って出直してきたのに。それでも見抜かれるの？）
この人の嗅覚に驚かされる。
（だからと言って、認めるわけにいかない）

「やだ。そんなわけないじゃないですか」
「えー、違うの？」
「当たり前です！」
「ピンときたんだけどなあ」
疑いの眼差しを向けつつ、菊間さんは深いため息をついた。
「にしても……東雲さんはまだ若いし、これから玉の輿に乗るチャンスが待っていると思うと、うらやましいわ」
（玉の輿って）
この人の思考回路にはついていけないと思いつつも、顔には出さずに笑顔で答える。
「菊間さんもまだお若いじゃないですか。それに素敵な旦那様だっていらっしゃるし」
「まあねえ」
菊間さんは五年前、ちょうど三十歳の誕生日に入籍した。結婚式に呼ばれたけれど、旦那様は超イケメンのエリートだった。
そんな人がどうして、私の年齢や立場をうらやましがるのかわからない。
「でもこの会社にいると、もっと別の結婚があったのかしらねーとか思っちゃうのよ」
「そうなんですか……」
「だってここ、本当に優良物件が多すぎるもの」
「物件って」

あっけらかんとすごいことを口にするから、私はただあんぐりしてしまう。
（自分の結婚が正しかったのかどうかって、やっぱり周りと比較したくなるものなのかな）
私にはさっぱりわからなかったけど、とりあえず曖昧な笑顔で濁して仕事に取りかかった。

＊

終業後、帰宅する途中、不意に希子ネエから連絡が入った。
『電話していい？』
断りを入れてから電話しようなんて、おネエにしてはかなり遠慮している様子だ。
（一応朝、心配ないってメールはしといたんだけどな……）
成人しているとはいえ、自分の主催パーティーから妹が消えてしまったら心配するのは当然かもしれない。
「いいよ」と返信した途端、着信コールがあった。
「もしもし。希子ネエ？」
『電話に出てくれてよかった……というかあんた、昨日誰と消えたのよ』
唐突に誰と消えたのかと聞かれ、一瞬狼狽える。
「その……会場にいた人と話が盛り上がっちゃって」
『危ないことはなかった？　変な人は呼んでないつもりだけど』

「っ、うん」
『嫌じゃなかったら、一緒にいた人の名前教えてくれない？　後々の取り引きに影響するかもしれないし』
「ええと……」
（一夜を共にするのは希子ネエの言う「危ない」に完全に入る、よね）
やらかした自覚はあるけど、後悔はない。でもおネエが本気で心配してくれてると思うと心苦しい。私は少し嘘も交えて昨夜のことを話した。
「実は、一緒にいた人の名前……わからないんだ」
『わからない？　会場用のニックネームは告げたでしょう？』
ここでルイさんの名を伝えてもよかったのに、なんとなく私はそれを言えなかった。
「聞いたかもしれないけど、酔って忘れちゃった」
パーティー会場のホテル内で移動したから、仮面姿のままでも違和感はなかった。
そこまで説明すると、おネエは呆れのため息をついた。
『助けてもらった流れでお話を……ねえ』
「会話も盛り上がったし、居心地よかったんだよ」
『でも、正体不明の男を信用しすぎるのは、どうかと思うわよ』
（うっ、それはそうだけど）
「で、でも、希子ネエのお客様だし。変な人はいないかと思って」

『ビジネス的には、信用できる人ばかりだったはずよ。ただ、酒癖とか女癖までは把握してないからね』
「そりゃ、そう……だよね」
（最初に話しかけてきてた人は、紳士とは言えない人だったし）
私の歯切れが悪いせいか、おネエが急に声を大きくした。
『まさか、あんた。ワンナイ……した!?』
（う、鋭い指摘!!）
「そ、そ、そんなことあるわけないじゃん！」
顔もわからない誰かと一夜を共にしたなんて、死んでも言えない。
おネエは派手だし破天荒（はてんこう）気味だけれど、女性が簡単に体を許すことには反対な人で。男に追わせる女になれと常々言っていて、そういうところは、堅実な兄と共通している。
（もっともな意見だって私も思うし……）
「ついつい朝まで話し込んじゃっただけだよ」
『仮面つけたままできる話がそんなにある？』
「あったんだよ」
『……ふーん』
（苦しいかな……でもこれで押し通すしかない）
ありがたいことに、二人の兄姉は私をとても大切にしてくれていて。突然の事故で両親を同時に

立ち読みサンプルはここまで

亡くしてからは、二人が私の親みたいに見守ってくれている。
そんな母代わりのような姉の主催するパーティーで妹がお持ち帰りされたとなると、事情はどうあれやっぱり嫌な気分になるだろう。
（とにかく、今はおネエを安心させなくちゃ）
「声が心地よくてつい、ね。ほら、私ってイケボな人が好きじゃない」
『イケボの客……誰だろう』
いつも嘘をつくとすぐに見抜かれてしまうけれど、今回はそう簡単にバレるわけにいかない。
「とにかく、希子ネエが心配するようなことはなかったんだから。もういいでしょ」
『まあね……でも、春花にはまだアルコールの入るパーティーは早かったね。危なっかしいったらないわ』
「失礼だなあ。私だってもうアラサーなんだよ？」
『なんと言おうと、次にあなたを参加させるならモクテルパーティーにするわ』
「モク……？」
『ノンアルコールカクテルで楽しむパーティーよ』
「わ、それいいね。楽しみ」
おネエは私の元気な様子に安心したようで、今度一緒にランチでもしようと言って機嫌よく通話を切った。
スマホを握ったまま、私はほうっと深く息を吐いた。

（ああー、そうだよねえ。ああいう出会いって普通じゃないよねえ）
必死にルイさんを庇おうとした自分の行動を振り返る。私のせいで、おネエを通して彼の悪い噂が広まるのは嫌だった。
（なんでこんなにムキになってあの人を擁護しようとしてるんだろ）
昨夜のことは私に悪い影響のあるものではないと確信している。むしろ、ルイさんと過ごした時間は永遠に忘れたくないと思えるくらいの素敵なものだった。
なんの根拠もないのに、こんな無条件に誰かを信じることってあるんだろうか？
（恋愛経験が多いほうじゃないから、わからないけど）
知り合って何度か会話をして、少しずつ距離を縮めて……好きを確信したらどちらかが告白をして……
（そういう順番が大事なんじゃなかったっけ）
誰に言われたのかわからないけれど、そんな「恋愛のテンプレート」みたいなものを、私はいつの間にか自分の中に持っていたようだ。
だから今回そのテンプレから大きく外れるような行動をとってしまった自分に驚いている。自分の知らない一面を知ってしまった。
過去に付き合った人は深く知る前に自然に別れがやってきて、それほど傷つかない程度の浅い付き合いだった。
なのに、昨夜のルイさんとの出会いはイレギュラーでディープだった。